

全国歴史教育研究協議会第54回研究大会（神奈川大会）報告

菅 高 校 岡 田 健

「転換期における歴史教育とは？」を基本テーマに、山下公園に程近いワークピア横浜において平成 25(2013)年 7月 31日(水)から 8月 2日(金)まで、全国歴史教育研究協議会 第54回研究大会を開催しました。全国から 280名 余りの参加者を迎え、研究協議・シンポジウム・記念講演・史跡見学などのプログラムを通して、充実した研究大会を成功裏に実施することができましたことを報告します。

ご後援いただいた神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、川崎市教育委員会、ご協力いただいたNPO神奈川歴史教育研究会をはじめとする関係各位に改めて厚く御礼申しあげます。また多忙な校務の合間を縫って研究大会の企画・運営に当たられた実行委員の方たちに、改めて感謝と敬意を表したいと思えます。

全国歴史教育研究協議会の研究大会を神奈川県で開催するのは、12年ぶり4回目のことです。前回は「21世紀を拓く歴史教育 ― 多文化共生の時代を生きる ―」をテーマに、平成 13(2001)年に神奈川大学を会場として開催しました。21世紀の初頭を飾る大会を成功させようと、企画・運営に皆で汗を流したことを思い出します。今回は高等学校の新学習指導要領が全面实施される年にふさわしい研究大会にしようと、社会科部会歴史分科会の力を結集して準備を進めてきました。私自身が運営を手伝い始めたのは平成 23(2011)年秋からですが、実行委員のメンバーはその前年から準備に着手していたと聞いています。さらに遡れば、今研究大会の種は平成 15(2003)年に蒔かれたとすることができます。この年の夏、大阪大学において「全国高等学校世界史教員研修会」が開催され、歴史分科会からも多くの教員が参加しました。高大連携、そして歴史教育と歴史研究の接続を掲げた研修会で、高校と大学の垣根を越えて活発な協議が行われたことを思い出します。

大阪で蒔かれた種が神奈川県において結んだ実が、歴史分科会が毎年夏季休業中に開催している「サマーセミナー」(日本史)であり、「高大連携の試み」(世界史)であります。平成 24(2012)年 8月に 3日間に亘って開催された「第 6回 高大連携の試み 夏季集中講座」では、基本テーマ「18世紀のアジアをどう教えるか」に沿って、午前中に高校生を対象として大学の教員と高校の教員がそれぞれ同一のテーマで授業を行い、午後には高校の教員と大学の教員による研究協議の場を設けるという形をとっています。大学の教員の授業は新たな研究成果を意識したものであり、高校の教員の授業は受験を意識した切り口を持っています。参加した高校生によるアンケートへの回答に沿って進められる午後の研究協議は、高大教員が情報や意見を交換する研修の場であるとともに、授業を振り返る検証の場でもあります。高校生のアンケートには、異なった視点の授業を受け、両者を繋げようと考察することにより理解が深まったという感想も見られ、授業研究そして生徒への指導の面で成果を挙げることができました。

このような 10年に及ぶ研究活動の積み重ねと実践に基づき、第 54回研究大会は企画されました。

初日である 7月 31日は、午前中の総会に続いて、午後には次の 4分科会を開催しました。

- 第 2分科会(日本史) 「様々な地域資料をどう授業に取り込むか」
- 第 3分科会(日本史) 「生徒の思考力・判断力をどのように育てるか」
- 第 4分科会(世界史) 「近代世界システム論をどう授業に取り込むか」
- 第 5分科会(世界史) 「中央ユーラシア史をどう教えるか」

各分科会では高校の教員による提案を 3本ずつ行うとともに、共同研究者として大学の教員を配置し、授業者としての視点と研究者としての視点の双方から議論を進めてもらうことにより、研究協議の深化と活性化を図りました。このような形で高大連携・接続を強く打ち出した企画は、全国歴史教育研究協議会の研究大会では初めての試

みです。各分科会における質の高い提案と、熱のこもった研究協議、そして共同研究者からの適切な助言など、遠方から参加した方にも十分満足していただける内容であったと思います。

8月1日は、午前中に「日本の近代史をどう教えるか」をテーマとしてシンポジウム(第1分科会)を開催しました。パネリストとして小学校・中学校・高校・大学の教員各1名にお願いし、コーディネーターには、神奈川の高校で長年勤務し現在は同志社大学で歴史教育を教えている児玉氏に依頼しました。

午後には大阪大学大学院文学研究科教授 桃木至朗先生に「高大連携でつくる新しい歴史教育 ～普通の教員が教えられる東南アジア史に向けた取り組みから～」と題した記念講演をいただきました。高大連携に熱意を持つ桃木先生ならではのテーマで、“明日の授業の役に立つ”内容であるとともに、高校世界史の枠組みの再編成が必要であるとの示唆に富んだ講演で、専門の東南アジア史に関しては、教員はこれだけ理解した上で教え方を考えて欲しいというガイドラインを、ユーモアを交えて紹介していただきました。

最終日である8月2日には2コースの史跡見学を実施し、稔り多い研究大会を無事終了することができました。

全国歴史教育研究協議会 第54回研究大会は以上のように学校間連携、なかでも高大連携、高大接続を意識して企画されました。「転換期」だからこそ歴史に学ぶ姿勢が重要であることは言を俟ちません。転換期において、歴史教育の果たすべき役割は非常に重いものです。しかし、一方で高校における歴史教育が“歴史嫌い”をつくっている、という指摘を受けることがあります。残念ながら、生徒にとって歴史は暗記の対象である、という状況が一掃されたとは言えません。また、高校で教える歴史と大学における歴史の間に大きな落差があるとも言われます。

私たち高校の教員は、中学校でどのような歴史が教えられているか把握しているのでしょうか？大学の教員は、高校の歴史の授業の様子を知っているのでしょうか？高校の教員は、歴史研究の動向にどの程度アンテナを張っているのでしょうか？

社会科部会歴史分科会は、このような問題意識から高大連携・高大接続を意識しながら研究を進めてきました。今回の研究大会もその一環として位置づけ、企画しました。もちろん一連の活動の全てが、大きな成果を挙げている訳ではありません。高校の教員、大学の教員ともに「歴史教育」という共通の土俵で協力し合う、ということを支に深く認識していく必要があるかと思います。良い意味でのパートナーシップの構築に、一層努める必要があります。高大連携を深めるための具体策の検討・模索も継続していかなければなりません。従来、必要だとされながら必ずしも前進しているとは言えない、小中歴史教育との連携を進める必要もあります。今回の研究大会は、これらの課題を再認識する良い機会でもあったと思います。またこれらの課題に取り組む力を、社会科部会歴史分科会が持っていることを実感することもできました。

私事となりますが、ここ10年近く社会科部会の活動から足が遠のいていました。縁あって昨年度社会科部会長を引き受けたことをきっかけに、社会科部会の活動や今回の研究大会の運営にも参加できました。この間に社会科部会の運営方法等も大分変わってきており、十年一昔を実感しています。

また、長らく教員の採用が極端に少なく、高齢化の波にさらされていた社会科部会でしたが、研究大会の発表をはじめ、さまざまな場面で力を発揮する若い教員の姿をよく目にすることができます。今回の研究大会でも提案者を務めたのは、多くが若い教員でした。通常の研究発表会とは一味違った研究大会で、全国からやってきた教員を前にして堂々と提案を行う姿に、若い力の台頭と一層発展していく社会科部会歴史分科会の姿を見ることができました。このことは今回の研究大会における大きな成果でありました。全国規模の研究大会の企画・運営あるいは提案という経験を糧に、さらなる活動の活性化を目指し、研究成果を教室に還元していきたいと考えています。

全歴研神奈川大会史跡見学報告 A コース（横浜方面）

川崎市立川崎総合科学高校 阿部 功嗣

ペリー来航から 160 年、関東大震災から 90 年という節目の年にちなみ、「開港地横浜と外国人～光と影（開港と関東大震災）」というテーマで、午前は山下・山手居留地中心地域、午後は山手の丘陵から中村町周辺と、かつての横浜郊外を中心に踏査した。

集合地の J R 桜木町駅で英国人鉄道建設技師モレル顕彰碑を見学し、鉄道発祥の地記念碑へ。モレルは翌年に病に倒れ外国人墓地に眠ることとなるが、遺志を引き継いだダイアックらにより、明治 5 年五月新橋－横浜間に日本初の鉄道が仮開業した。次に弁天橋のたもとでみなとみらい方面および開内方面を一望した。弁天橋の向こう岸は、かつての「横浜村」砂州先端部にあたりに生糸検査所、帝蚕倉庫跡地の再開発が見える。続けてみなとみらい地区をバス車窓より見学した。横浜近代水道の父パーマー提案による「横浜船渠」（のち三菱造船所）跡は、現在日本丸メモリアルパーク、ドッグヤードガーデン等になっている。明治末より保税倉庫が立ち並んだ新港埠頭には、JICA、海上保安庁基地の他に、明治 44 年(1911)竣工の赤レンガ倉庫を改修した赤レンガパークなどレジャー施設が整備された。

横浜税関、横浜市開港記念会館、幕府運上所跡碑、外国郵便発祥の地碑、神奈川県庁本庁舎を車窓に眺め、横浜開港資料館へと向かった。「玉楠」の前で中武香奈美先生(開港資料館研究員)と合流し、嘉永 7 年(1854)日米和親条約締結の地となり、以後長い間英国領事館であった資料館付近や、横浜の砂州を「出島」化した幕府の意図、以来大きく変わることのない街路や地番など、江戸時代の絵図や明治・大正時代の地形図をもとに山下外国人居留地の歴史について詳しく説明を受けた。企画展「関東大震災と横浜～廃墟から復興まで」では、震災当時の写真や被災資料、当時の小学生が書き残した「震災作文」を目にした。開港広場を通り山下臨港線プロムナードへ上がると、開港当初に建設されたイギリス波止場（またその形状から「象の鼻」と呼ばれた）が一望にできる。その付け根から鉄の栈橋が海に延ばされ、現在の「大栈橋」へと発展した。昭和 5 年(1930)年開園の山下公園、英 7 番館、ホテルニューグランド、マリンタワー、ヘボン邸跡などを車窓より眺め、山手方面へと向かった。

元町を横切り代官坂を上ると「石川代官屋敷」がある。幕府よりペリー一行の世話役を命じられた名主石川徳右衛門の屋敷跡で、ペリー自身も訪れた屋敷地には、長屋門の一部が現存している。隣接する元町公園の一角は幕末に来日して外国船飲料水販売や煉瓦・屋根瓦製造を行った仏国人ジェラルルの工場跡地である。「ジェラルル水屋敷」と呼ばれる地下貯水槽が発掘され、保存展示されている。公園から丘上へと登り、日本現代建築の父レーモンド設計のエリスマン邸内を見学し、山手本通りを山手聖公会、山手 234 番館、外国人墓地を見ながら歩いて港の見える丘公園へと入った。昼食会場の KKK ポートヒルからは、眼前にイギリス館や沈床花壇、大佛次郎記念館、遠くに横浜ベイブリッジ、山下埠頭、大黒埠頭などを見渡す素晴らしい眺望に参加者一同が感嘆の声を上げた。

午後は、後藤周先生（元横浜市立中学校教諭）と合流し、「関東大震災と横浜」というテーマで、震災直後被災地で発生した流言と政府の対応、この横浜で起きた朝鮮人を中心とした人々の虐殺という悲惨な出来事について 1 時間ほど講義を受けた。港の見える丘公園を後にして大芝台の中華義荘へ。中華義荘は開港当初横浜に居留する外国人の 6 割を占めた中国人買弁らが、外国人墓地での仮埋葬地が手狭になったことや、欧州との風習の違いを理由に、神奈川県から明治 6 年（1873）に用地を借り受けたものである。現在は中国へ送還される棺も無くなり、日本式の墓地が敷地内に立ち並んでいる。墓域の奥には震災で虐殺された中国人の為の慰霊碑が建立されている。

中華義荘を後にして、打越橋をくぐって車橋を渡り、震災時に大爆発を起こした揮発油倉庫跡地、逃げ込んだ多くの人々が亡くなった第三小学校・万治病院跡地、震災作文が書かれた南吉田第二小学校周辺を、後藤先生の解説を受けながら車窓から見学して中村橋へと向かった。震災作文には当時の小学生がこの一帯での目の当たりにした虐殺の様子が生々しく書き残されていた。最後の踏査地、堀

内町の宝生寺境内には「関東大震災韓国人慰霊碑」があり、毎年9月1日に追悼会が開かれている。この追悼会は震災翌年、大震災の迫害を生き延びた李誠七(イ・ソンチル)氏が、宗教家で朝鮮人の保護に尽力した村尾履吉氏や住職佐伯氏の協力を得て開催したもので、今年に至るまで90年間途切れることなく営まれているとのことである。慰霊碑は昭和46年(1971)に民団によって建立されたもので、背面の碑文には「虐殺」の文字は刻まれていない。

本牧を回り横浜駅へと向かう車中で、歴史の表裏から学ぶべきことについて反芻しながら無事に終了となった。



ジェラール水屋敷



宝生寺「関東大震災韓国人慰霊碑」

全歴研神奈川大会史跡見学報告 B コース (箱根方面)

県立相模向陽館高等学校 鍵和田 武彦

大会3日目の8月2日(金)、20名の参加者で表記の史跡見学会が実施された。

最初の見学地は石垣山一夜城跡である。小田原の市街地はスムーズに通行することが叶い、上々の滑り出しであった。遠方からの参加者が多数いるので帰りの新幹線などの時間に間に合うように終えなければならないというプレッシャーと、折角遠方から神奈川に来ていただいたので、あれこれ見ていただきたい、というせめぎ合いの中で、泣く泣くいくつかの候補地を切り捨ててのコース取りとなっている。

一夜城は小田原の街を一望できる山頂に築かれているため、舗装されているとはいえ細い山道を通らねばならず、当然のことながら大型バスの通行には元々不適当な所である。ところが予定のルート上には不法駐車をする車がいて通れず、やむを得ず別ルートへ。最適の第1ルートを外すことになってしまったのでこんなところを大型バスが通るのか?というような迂回路を進むことになり、当然のことながらバスが難儀をしていることは、何度も繰り返される切り返しによって明らかであった。今日の見学会は大丈夫かな?という不安の黒雲がいきなる沸き立つことになったのである。やっとの思いで難所を通過すると再びカーブに違法駐車する車が……。ハラハラドキドキの連続であったが城跡には予定通りに到着できたことは望外の幸せ?であった。

一夜城は1590(天正18)年の豊臣秀吉の小田原攻めに際して約80日かけて築かれたもので、関東における最初の総石垣の城として貴重な城とされている全国的にも著名な史跡である。見学途中からは雨がばらつき始め一望できるはずの小田原の街はガスに煙り、まったく見ることが叶わなかった。あちこち見て回るうち途中からは強い日差しもさし蒸し暑くなるなど変転著しい天候であった。一夜で築かれたという伝説の割には本格的な石垣があちらこちらに残存しているので多くの参加者にとっては驚きであったようだ。

続いては、昼食を兼ねて富士屋ホテルへ。富士屋ホテルは1878(明治11)年、山口仙之助によって操業された日本有数のクラシックホテルとして著名である。その雰囲気や十分に満喫しながら昼食をいただくことができ幸せな気分になることができた。昼食後は館内ツアー。ホテルの歴史をさまざまな展示品・建物をめぐることによって辿ることになっていた。実はこのツアーは宿泊客対象のものであったが特に富士屋ホテルのご厚意で実現したものである。

ホテルの宿泊客には有名人が目白押しである。大日本帝国憲法の発布の際の日記が引き合いに出される「お雇い外国人」ベルツ。「奇跡の人」ヘレン・ケラー。「喜劇王」チャールズ・チャップリンが来日した 1932 年 5 月 14 日の翌日には 5・15 事件が発生した（ホテルへのチェックインは 5 月 27 日）。

当時世界の喜劇王がやってくるというのでホテル前は大騒動であったようだ。期待に胸を膨らませた人々が見守るなか、車を降りてきた人物は色白でハンサムな白人紳士。子どもたちはチャップリンが来るなんて嘘だったと思ったようである。皆が期待していたのは山高帽にチョビひげを生やしダボダボズボンを着用しステッキを持ったチャップリンだったからである。

変わったエピソードとしては、1891 年に来日したロシア皇太子ニコライの宿泊予約が内務省を通じて富士屋ホテルに入っていたというはなし。日本史の教科書が必ず触れる「大津事件」のため皇太子は急遽帰国することとなり宿泊は実現しなかった。建物は本館（1891 年）、別館・菊華荘（1895 年）、1 号館・2 号館（1906 年）、花御殿（1936 年）など、国登録有形文化財・近代化産業遺産の指定を受けているところも見どころである。

次の見学地は芦ノ湖畔の箱根神社である。箱根神社の祭神は箱根大御神様と総称されるニニギノミコト、コノハナノサクヤヒメノミコト、ヒコホホデエミノミコトの 3 神である。箱根山は古代の山岳信仰の流れをくみ一大霊場として信仰を集めてきたが、明治になって箱根神社と称するようになった。

最後の見学地は箱根関所資料館・箱根関所跡。箱根町生涯学習課長の大和田氏から懇切丁寧な解説をいただいたことは史跡見学を稔り大きいものにした。いきなり「高札の文書を読めますか？」と問われ私などは冷や汗をかいてしまった。

俗に「入鉄砲に出女」などといわれるが、大和田氏によれば実は箱根では「出女」のチェックはたいへん厳しかったが「鉄砲」のチェックはしなかったし男子は通行手形が必要なかったとのこと。これには驚く人もいるのではないだろうか。ユーモアあふれるそんな解説に時間のたつのも忘れてしまうほど、内容の濃い見学となった。



石垣山へ向かう道



石垣山一夜城跡



富士屋ホテル花御殿



遠見番所の眼下に広がる芦ノ湖と箱根関所（復元）



研究報告書の表紙を飾ったのは開港期の埠頭（象の鼻）の絵でした。



大会1日目開会式と総会



総会前のジャズ演奏



山崎全歴研会長



岡田大会委員長



来賓成瀬氏



松本指導主事



1日目 第五分科会



2日目シンポジウム（第一分科会）



第一分科会コーディネータ&パネリスト



桃木先生記念講演